

「現職参加」
NECソフト株式会社

小原 史丈 さん

OHARA
Fumitake

PROFILE

1977年東京都出身。2000年に大学を卒業後、NECソフト株式会社に入社。システムの構築やクライアントへのシステムの導入・保守といった業務に携わる。2010年からコンピュータ技術隊員として、バングラデシュの首都ダッカの人事院に派遣中。

世界の99%の人たちのために

「バングラデシュは、街も人々もエネルギーに満ちあふれています。首都ダッカは大変な活気があり、数カ月いるだけでも大きな変化を体感できます」
そう語るのは、コンピュータ技術隊員として2010年から同国に派遣されている青年海外協力隊の小原史丈さん。高校時代の部活仲間参加がきっかけで身近な存在になっていた協力隊に、「いつか自分も参加してみたい」。そう関心を寄せていた。しかし、新卒でNECソフト株式会社に就職してからは、仕事中心の毎日で協力隊のことを考える余裕などなかった。約10年、コンピュータエンスタアなどの売上実績を

JICA
Volunteer
Story

「経済成長の原動力となる
IT技術の発展に貢献したい」

バングラデシュでコンピュータ技術を教えている青年海外協力隊員の小原史丈さん。目覚ましい経済発展が期待される同国の将来を見据え、技術の普及・発展に尽力している。

集計するPOSシステムに、プログラマーやシステムエンジニア、プロジェクトマネージャーとして携わり、経験を重ねてきた。

そんな彼が訪れたのは、自分の年収が世界でどのくらいの順位にあるかを教えてくれるウェブサイトに「Global Rich List」で、自分が世界で上位1%以内に入ることを知ったときだった。「サラリーマンの自分が、世界が100人の村だったら一番のお金持ちなのかと驚きました。『年収300万円時代』といわれる日本ですが、それだけあれば世界で上位10%以内に入ります。やはり日本は裕福な国なのだと再認識しました。そんな日本のためだけではなく、世界の人のために何かしたいと考えるようになったのです」。

そこで、かつて関心を持っていた青年海外協力隊のことを思い出し、「行くなら今しかない!」と、自分の経験を生かせるコンピュータ技術隊員への応募を決意。会社の理解を得ることができ、仕事を辞めずに参加できる「現職参加制度」を利用して、2010年1月、バングラデシュのダッカに派遣された。

大きな可能性を秘めた
IT産業の発展を支援

人事省のコンピュータセンターが小原さんの職場だが、ここに派遣されたのには理由がある。人事省は公務員の人事データを一括で管理する組織にもかかわらず、ウイルス対策が進んでいないのだ。そこで小原さんは、故障したパソコンの修理方法や、感染したパソコンからのウイルス駆除方法、効果的なウイルス対策などを職員に指導し、彼らのスキル向上を目指している。「同僚たちは親日的で働きやすい環境にある」と言うが、時にはコミュニケーションがうまくいかないことも。急ぎの頼みごとをしたのにのんびりしている同僚に腹を立てたこともあった。「普段はベンガル



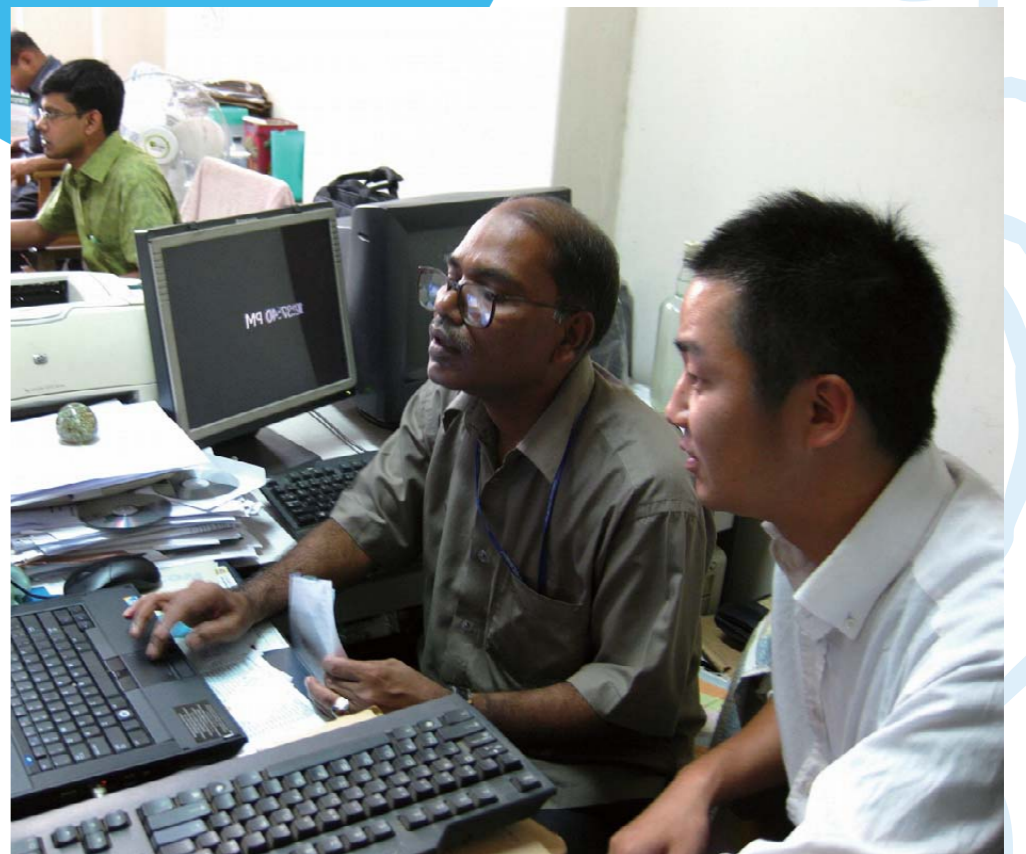
a.ダッカ大学のコンピュータ学部長と面談し、ITEEコンテストに学生を参加させてくれるよう協力を依頼
b.ITEEの広報のため、「SOFT EXPO」にブースを出展。バングラデシュ科学技術ICT省大臣(右)に説明を行った
c.各グループで設計した走行マシンの燃費性能を競うイベント「エコラン」にブースを出展し、ITEEをアピール
d.「ITEEコンテスト」ではITEEのトライアルテストを実施。269人の受験者たちが真剣に取り組んでいた

語で話していますが、英語が伝わる場合は英語で解決したり、言葉だけではなく行動で示したりと工夫しています」と小原さんは言う。

さらに、ほかのコンピュータ技術隊員とともに、「ITEE(情報処理技術者試験)をバングラデシュに導入しよう」というプロジェクトを推進している。アジア各国で認証されているこの資格を導入すれば、共通の知識を持った域内のIT技術者をつなぐ懸け橋になる。また就職の資格として重視されるようになれば、情報技術系の大学を卒業していなくても国内外のIT企業に就職しやすくなるメリットがある。そしてITEEが浸透してIT技術者が増えれば、IT企業での雇用創出、ソフトウェア輸出による外貨獲得など、バングラデシュの経済に大きく貢献できるかもしれない。小原さんらはトライアルテストを兼ねたイベント「ITEEコンテスト」を企画したり、バングラデシュ最大のITイベント「SOFT EXPO」でブースを出したりと、広報に尽力してきた。残りの任期は7カ月となったが、「このプロジェクトを後任の隊員たちにつなげ、今後はバングラデシュの人々が自主的に取り組んでほしい」と意気込む。

任期終了後は、バングラデシュにかかわる自社の途上国ビジネスに携わり、現職参加をサポートしてくれた会社にも貢献したいという小原さん。ビジネスが生まれれば雇用が創出され、お金が循環し、国の経済全体が活性化して、国を発展へと導く原動力になるだろう。「ここ数年、平均6%の経済成長を遂げているこの国は、今後日本のビジネスの相手になると思います。ベンガル語の習得や文化・慣習を知った協力隊での経験を生かし、バングラデシュでのビジネスに貢献したいです」。

小原さんは、日々成長していくこの国の将来を、これからも見守っていく。



派遣先の人事省コンピュータセンターで、同僚ともにパソコンに発生した問題を検証中